

## 平成 20 年度海外研修派遣報告

釧路市医師会病院 鈴木 信昭

### 1. 参加した目的とその成果

初の渡米と念願であった本研修参加にあたり、たくさんの目標や期待で胸を膨らませていましたが、最大の目的は、スタンフォード大学の著名な先生方の講義や施設見学を通じて研究の現状やそのレベルの高さを肌で感じ、一つでも多くの新しい知識を吸収することでした。講義は、Cardiac CT, MRI(Cardiac, Neuro), PET/CT, Molecular Imaging などについて行われ、どれも新鮮ですばらしい内容でした。各モダリティの基礎や臨床応用、さらには現在スタンフォード大学で進行中の研究に関する最新情報の話題もあり、その充実度は想像をはるかに超えるものでした。英語に不安を感じての研修参加でしたが、講義にはすべて同時通訳がつき、まったく不自由なく研修を受けることができました。本研修に参加して本当によかったですと改めて実感しています。

### 2. 日本と米国の放射線技師制度の違いをどのように感じたか

米国の放射線技師制度の概略は理解しているつもりでしたが、本研修で米国の放射線技師の方々と話す機会に恵まれ、放射線技師の業務や組織の中での役割を垣間見ることによって、日本との相違が明確になりました。診療放射線技師の免許ひとつで様々なモダリティの業務が可能な日本に対して、米国では最初に radiographer の資格を取得し、その後 CT・MRI・US・核医学・治療などに従事するためには、さらにそれぞれの専門分野の資格が必要です。また、スタンフォード大学では 3D Lab で画像解析が行われ、臨床における撮影業務と撮影後の解析業務が完全に独立していました。これは、米国における診療保険請求の仕組みが背景にあり、分業化は物事を常に効率的に考えるという米国の国民性の表れと推測しますが、撮影から画像処理までを一連の業務として捉える日本のシステムにも利点があるように感じました。大切なのは、米国の現状を十分に理解し、その上で日本にはない米国の制度の優れている点を取り入れていくことと考えます。

### 3. 今回の研修で得たことを今後どのように生かしたいか

今回の研修では非常に多くのことを学びました。CT や MRI の講義で得た知識を何らかの形で臨床に応用できればと考えています。また、さまざまな先生方の講義を聞く中で研究に対する情熱を感じ、そのエネルギーを分けて頂いたような気がします。これからのお仕事に生かしたいと思います。



そして、何かの縁で 1 週間の研修を共にした全国の同志と末永く人間関係を保ちながら切磋琢磨し、今後の日本の放射線技術の向上に少しでも寄与することが、本研修の参加者全員に与えられた課題であろうと考えています。最後に、日本放射線技術学会、スタンフォード大学、GE 横河メディカルシステムの関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

写真: Wine/Cheese Reception にて  
米国の放射線技師の方々とともに  
右から 4 番目が著者